

総合科学部・ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

- I 研究水準 研究 1-2
- II 質の向上度 研究 1-3

※「ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部」は、平成 21 年度に「人間・自然環境研究科」より改組された。

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、138 名の教員に対し、平成 19 年度に 150 件を超える著書・学術論文を公表しており、期待される水準にある。また、研究資金の獲得状況に関しては、多くの教員は大学院及び学部専門教育のみならず全学共通教育も相当量担当しており、研究分野は多岐にわたっているため大きな額の外部資金を獲得できる大プロジェクトの立ち上げは難しいが、その分、様々な分野において一定程度額の外部資金の獲得が達成されていることなどは、相応な成果である。

以上の点について、総合科学部・人間・自然環境研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、総合科学部・人間・自然環境研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における総合科学部・ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部の判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、卓越した業績は見られなかったものの、「運動体・安部公房」や物理系の論文に優れた業績がいくつかあり、相応の研究成果を上げている。また、社会、経済、文化面では、「管弦楽のための《主題のない 7 つの変奏曲》（平成 16 年 10 月 20 日、東京オペラシティ大ホール）」で、卓越した成果を上げている。こ

これらの状況などは、相応な成果である。

以上の点について、総合科学部・人間・自然環境研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、総合科学部・人間・自然環境研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

なお、提出された研究業績説明書のうち、優れた業績と判断できるものが少なかったことから、今後の自己評価能力の向上が期待される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における総合科学部・ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部の判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

改善、向上しているとはいえない

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 3 件、「改善、向上しているとはいえない」と判断された事例が 3 件であった。

「改善、向上しているとはいえない」と判断された事例の判断理由は以下のとおりである。

○「総合的・融合的研究」については、いくつかの融合的研究の課題が示されているが、その成果に関する記述がないので、改善、向上しているとはいえないと判断される。

○「自然科学の多方面の研究の進展」については、年度によって差があり、高インパクトファクター（IF）の論文数が 13 件（平成 19 年度）という数は、教員数 48 名の組織として特段高い数値ではない点から、改善、向上しているとはいえないと判断される。

○「人文・社会科学等の個別専門分野の研究」については、個別専門分野の研究に高い水

準のものが散見されるが、全体としてその数は多くない点で、改善、向上しているとはいえないと判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、判定を以下のとおり変更し、第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 6 件であった。